

研 究 分 野	病理	部 名	魚 類 部
研 究 課 題 名	海産魚類防疫対策事業		
予 算 区 分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H.13 ～ H.17		
担 当	菊谷 尚久		
協 力 ・ 分 担 関 係	家畜保健衛生所、(社)日本水産保護協会		

〈目的〉

海面増養殖での魚病発生時における早期の魚病診断並びに防疫指導の実施により、海産魚類で行われている増養殖の魚病被害の軽減と蔓延防止に努める。

〈試験研究方法〉

- 1 魚病診断
魚病発生時における魚病診断・検査による魚病対策の実施。
- 2 防疫指導
増養殖関係機関の巡回による防疫指導の実施。
- 3 魚病情報収集
魚病関連会議等の出席による情報交換及び魚病情報収集。
- 4 魚病技術研修
海産魚類の魚病診断及び病原体検査実施のための技術習得。

〈結果の概要・要約〉

- 1 魚病診断
平成16年度の魚病相談、魚病診断及び検査件数は16件で、前年度よりも1件少なかった。魚種別件数で見ると、例年と同様、増養殖対象魚種に関するものが大部分を占めており、ヒラメ、ウスメバルがそれぞれ3件、クロソイ、マコガレイ、マダラ、ニジマスがそれぞれ2件となっている。
魚病診断の結果、疾病別ではウィルス性疾病は確認されず、細菌性疾病ではクロソイでビブリオ病が、マコガレイ、マダラで滑走細菌症が見られた。寄生虫性疾病は種苗生産中のキツネメバルとウスメバルでコストア症が発生した。津軽海峡で行われている海面養殖用のニジマス種苗の病原体検査を実施したが、病原体は検出されなかった。ヒラメの種苗生産初期に連続して腸管白濁症による大量へい死が発生した。また、高水温で経過した夏季には、クロソイにおいて赤潮発生に起因するへい死が、ウスメバルにおいて高水温障害によるへい死が発生した。
- 2 防疫指導
県内の増養殖関連施設19ヶ所について巡回指導した。またその際に水産用医薬品の適正使用の指導を行った。また、養殖場については薬事監視員とともに巡回した。
- 3 魚病情報収集
種々の魚病関連会議に出席し、情報交換並びに情報収集した。
- 4 魚病技術研修
内水面研究所においてPCR法の技術研修を受けた。

〈主要成果の具体的なデータ〉

表 1、平成16年度までの最近5ヶ年の魚種別の魚病相談、診断及び検査件数について

年 度 魚種名	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	合 計
ヒラメ	4	9	8	4	3	28
クロソイ	2	5	8	3	2	20
マコガレイ	4	1		3	2	10
マダラ		1		1	2	4
ウスメバル	1		5		3	9
キツネメバル				1	1	2
ニジマス	6	2	3	1	2	14
シロギス	3					3
マフグ	1					1
ヌマガレイ			3			3
ボラ			1			1
マハゼ			1			1
マガレイ					1	1
アラスカメヌケ		1				1
クロマグロ				1		1
トヤマエビ	1					1
エゾアワビ	2			3		5
合 計	24	19	29	17	16	105

表2 平成16年度における魚病の魚種別、疾病別相談、診断件数について

疾病名	ヒラメ	クロソイ	マコガレイ	マダラ	ウスメバル	キツネメバル	ニジマス	マガレイ	合 計
腸管白濁症	3								3
腹部膨満症					1				1
ビブリオ病		1							1
清走細菌症			2	1					3
コステア症					1	1			2
リンフォシスチス症								1	1
不 明				1					1
そ の 他		1			1		2		4
合 計	3	2	2	2	3	1	2	1	16

〈今後の問題点〉

・薬事法改正に伴い、水産用医薬品の使用基準も改正され、その猶予期間も終了することから、関係者への適正使用を徹底する必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

・次年度も同様に実施する。

〈結果の発表・活用状況等〉

・H16年度魚類防疫体制整備事業地域合同検討会北部日本海ブロック